ノンフィクション教材を活用した「21 世紀型学習」の開発

―学びを楽しみ、生き方を探る（中学校国語科）―

教育実践応用領域　授業づくり履修モデル
判治　雄介

はじめに―研究の概要―

答えのない複雑で多様な価値観の混在する時代を「たくましく生き抜く力・リテラシー」を育てる観点から、小中学校国語科教材では記録・報道・伝記（写真・グラフ等のデータ）等のいわゆる「ノンフィクション教材」が増加してきている。本実践研究は、未だ十分な授業研究が行われていないこうしたテキストを対象に、中学校国語科「習得・活用型能力」育成の授業・評価開発研究を行うものである。

次期学習指導要領の骨格となる「21 世紀型能力・学力」（文科省、国立教育政策研究所）では「個人として自立し、他者との協働的な学びによる新たな知識や生き方の創造」（第２期教育振興基本計画他）、「習得を生かして活用する力（知っていることから何ができるか）」「教科の学びを生き方や価値観と関連づけるメタ認知・学び方を学ぶ学習」「教科の学びを超えた汎用的能力・カリキュラム開発」等がめざされている。こうした学びを創るためには、情報・メデイア理解、コミュニケーション能力育成の中核となる国語科における習得・活用型（探究）能力・学力の明確化（学力テスト対応も含め）、情報の正確な理解（習得）から多様なテキストの解釈・判断力（活用・探究）、主体的な課題解決能力（総合的・統合的な学び）につながる新たな視点からの教材観・授業評価観が必要である。

１　実践研究主題の設定と経緯、背景等

(1)本校の生徒の学びの実態と課題

Ａ市立Ａ中学校は、生徒数 905 名、学級数 27 クラス、職員数 64 名の市内一の大規模校である。市の中心部に位置し、学校の近くには、国道一号線が通っていたり、名鉄本線の駅があったりと利便性の高い交通網が敷かれている。昔ながら地域に住む複合家族や、新興住宅地の一戸建てやマンションに住む核家族と、様々な構成をもつ家庭が混在する。

生徒については、比較的落ち着きのある生活を送る中で、学習や学校行事、生徒会行事と、学習活動のいろいろな場面で、意欲的に行うことができている。また、部活動についても、多くの生徒が積極的に参加しており、休日の時間も使い、盛んに取り組まれている。

しかし、学級や部活動によっては、生徒の取り組み方に差が出たり、生徒の満足感に偏りがあったりするように見られる。積極的に取り組む生徒の姿の影に、投げ出してしまう生徒の姿もあり、生徒自身の物事に対する能動性についての二極化が見られる。

その様子は授業でも見られ、特に学習面では、次の課題が上げられる。

ひとつは、意欲的ではあるが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることが苦手な生徒たちの姿である。

もうひとつは、人の言っていることに、言葉をはさむが、自己を語ることがあまりない姿である。授業中の発言についても、論理立って話すことが苦手な生徒たちの姿がある。

そこからは、学びに対する楽しさや喜び、感動を感じないことが少なくないのだと感じている。生徒自身に、生きる勇気や誇り、自尊心をもたせ、生き方や感受性、思考力・判断力・表現力等とかかわって「学ぶ楽しさ」を感じさせる必要がある。

また、学習する目的は何かというところまで掘り下げた動機づけのある単元計画、学習した知識や技術を書くことや話すことに生かした思考力・判断力・表現力等を高められるような授業づくりが必要だと考える。

(2)本校の研究経過と特色

「学びを楽しむ生徒の育成―問題意識の創出・持続・発展を求めて―」という主題のもと、生徒の問題意識を高める工夫をすることで、課題に対して主体的に取り組み、心から学びを楽しむことができる生徒の育成を目指し、研究を行っている。

特に、学習の主体者は生徒であり、生徒にとって学びがいのある授業をつくらなければならいという考えのもとに計画、実践に取り組んでおり、生徒の「なぜそうなるのか」「これを学ぶとどうなるのか」「これを解決したい、わかるようになりたい」という問題意識を大切にしている。

２　実践研究主題

「21 世紀型能力（試案）」（国立教育政策研究所、2013, 2014）の育成を見据えたノンフィクション教材を生かした学習指導、評価を実践し、効果的な学習過程の在り方を検証する。

３　研究の目的

(1)国がすすめるこれからの方向性

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会では、13 回にわたる議論を踏まえ、平成 26 年３月 31 日に論点整理が取りまとめられた。

主な提言事項として挙げられたことは、今後、学習指導要領の構造を、①「児童生徒に育成すべき資質・能力」を明確化した上で、②そのために各教科等でどのような教育目標・内容を扱うべきか、③また、資質・能力の育成の状況を適切に把握し、指導の改善を図るための学習評価はどうあるべきか、といった視点から見直すことが必要ということが述べられた。**（注１）**

育成が求められる資質・能力の枠組みについては、自立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を育成するために、例えば、「主体性・自立性に関わる力」「情報活用力」「対人関係能力」「学びに向かう力」「グローバル化に対応する力」「課題解決力」 「持続可能な社会づくりに関わる実践力」などを重視することが必要であると考えられている。その際、国立教育政策研究所の「21 世紀型能力（試案）」も踏まえ、生きる力へと、つなげ、育成すべき資質・能力を明確に捉えていく必要があると考えられている。**（注２）**

特に、国立教育政策研究所の「21 世紀型能力（試案）」については、まだ試案の段階ではあるが、踏まえていかなければならない。「21 世紀型能力（試案）」については、国立教育政策研究所は、次のように定義をしている。

> 「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組みである。

「21 世紀型能力（試案）」は、「日本型資質・能力の枠組みである」とされているが、その枠組みについては、試案の段階であり、まだまだ明確に捉えづらいところがある。

そこで、日本の「21 世紀型能力（試案）」以前から流れのある、アメリカの「21 世紀型スキル」についても考えたい。

楠見（2015）は、21 世紀型スキルを「21 世紀に生きる市民が情報コミュニケーション技術の進歩に対応したリテラシー」と定義した。さらに、（ａ）思考の方法（批判的思考・問題解決・意思決定、学び方の学習、メタ認知等）（ｂ）仕事の方法（コミュニケーションと協調）（ｃ）仕事のためのツール（情報リテラシー、情報コミュニケーション技術リテラシー）（ｄ）市民生活（市民性、人生とキャリアの発達等）と四つのカテゴリーに分け、整理している。**（注３）**

国立教育政策研究所の「21 世紀型能力（試案）」が思考力を中核として構造しているのと同様に、ここでも、重視されているのは、（ａ）の思考の方法としての批判的思考や問題解決スキルとなっていることが分かる。

次に、育成すべき資質・能力に対応した教育目標・内容については、現在の学習指導要領に定められている各教科等の教育目標・内容を三つの視点で分析した上で、学習指導要領の構造の中で適切に位置づけ直したり、その意義を明確に示したりすることについて検討することが必要とされています。三つの視点とは、以下の三点である。

> ア）教科等を横断する汎用的なスキル（コンピテンシー）等に関わるもの①問題解決、論理的思考、コミュニケーション、意欲など②メタ認知（自己調整や内省、批判的思考等を可能にするもの）
> イ）教科等の本質に関わるもの（教科等ならではの見方・考え方）
> ウ）教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの

この相互のつながりを意識しつつ扱うことが重要とされている。

また、育成すべき資質・能力に対応した学習評価については、評価の基準を「何を知っているか」にとどまらず、「何ができるか」へと改善することが求められている。そのためには、現行の学習評価の取り組みに加えてパフォーマンス評価を重視する必要がある。そこで、具体的な方法論についても検討が急務となっている。

(2) 生徒の実態と学びの課題

PISA2003 年の結果からは、日本の子どもの学力面での弱さが露呈された。

それは、「文書の解釈や評価」と「自分の意見の記述」である。この弱さは、特に図やグラフ、地図などの「非連続型テキスト」の問題で見られた。文書の解釈や評価する力や、自分の意見の記述する力は、いわゆる活用型の学力であり、そのような学力の定着や向上が見られないのは、問題として取り扱われているような、図やグラフ、地図などの「非連続型テキスト」が、従来の日本の国語科教育では、あまり取り扱われてこなかったという現実問題がある。

また、学校教育法 30 条の２では次のようにあげられている。**（注４）**

「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」

知識及び技能を習得するだけでなく、それらを活用して課題解決にあたることが述べられている。これはこれまでの知識理解、受動・記憶型の学習からの転換を意味していると考え、「思考力、判断力、表現力等」の育成につながるような「活用」の段階を位置づけることや、学びの系統性の明確化を図ることが急務であると考える。

(3)国語科での授業研究の現状と課題

①段階的な指導過程論の見直し

従来の国語科の授業では、「基礎・基本的な知識・技能学習」からいきなり相互交流や伝え合いといった「発展的な学習」に展開することが多く見られた。そこには、国語科における習得・活用の関係性が未整理のままに取り組まれている印象を受ける。

そこで、「習得・活用型学力」の段階の明確化とその重視を大切にした指導過程の見直しの必要があると考えた。

習得型学力を定着させる場面では、基礎学習として、全ての教科の基礎となる学力を育てる学習段階と、基本学習として、国語科固有の基本となる学力を育てる学習段階がある。次に、活用型学力を身に着ける段階へとつなげる。

また、「自分の考え・意見を持つ」「論理的にわかりやすく書く『型』」を育てる学習から、読み取った内容や価値や学び方を、自分の立場から「論理的に判断・再構成」する学習段階へと踏まえることが必要となる。

そして、「話す力・聞く力、論理的に伝え合う力（書く）」学力を育てるモデル学習　となっており、自分の考えを目的や相手・場面に応じて、的確に報告説明・分析・評価、交流する学習段階となる。

評価・一般化では、振り返り学習などに取り組み、学びの一般化を図ります。何がどうわかればよいのか、と視点から指導過程を構成していく。最後に、探究型学習へとつなげていくことが必要となる。

②メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについて、楠見（2015）は、情報を評価・識別する能力、情報を批判的に読み取る能力と述べている。現代社会におけるメディアの発達や多様化により、情報をもたらす影響力は高まっていることは危機として感じる。それが繰り返されれば、ますます、現代社会においては、情報メディアを主体的に読み解き、必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力の獲得が必要となってくると考える。今までの国語科では、不明確であった、「非言語情報」を読み解く指導方法をはっきりさせ、習得型学力を定着、活用させたりすることで、「21 世紀型能力（試案）」の育成へとつなげていきたいと考える。

③なぜ今、「ノンフィクション教材」なのか

従来の国語科教育では、「文学的文章」「説明的文章」という二つの概念で教材文が分けられ、実践、提案されてきた。しかし、事実を記述した文章であるノンフィクションの教材文については、このどちらにも当てはめて考えることは難しい。ノンフィクションの文章をひとつの教材の概念として位置づけ、教材の価値や意味、指導法を示していきたい。

ノンフィクション教材は、子ども達自身の生活経験や現実と結びつけて考えやすいことが挙げられる。特に、日々の人間関係やこれからの生き方について悩むことの多い小学校高学年から中学・高校生の子ども達にとっては魅力的な教材となる。思春期を迎えた生徒は、「自己の生き方」を必死に模索し始める。その中で、人の生き方や事実が書かれているノンフィクションの文章に惹きつけられて読み、自問自答しながら生きている。何より「事実」には説得力がある。授業者として系統的・段階的に正しく指導ができれば、子どもにとってこれほど魅力的な「生き方」を学ぶことができる学習はないだろうと考えている。

4　研究実践の構想と方法

(1)「習得」から「活用」「探究」へ―21 世紀にふさわしい学力をつけるために

学校教育法の改正により、「学力の重要な３つの要素」が明らかになった。「基礎・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力などの育成」「主体的に学習に取り組む態度、学習意欲の向上」である。これらを背景に学習指導要領の改訂があり、「習得」から「活用」「探究」への指導過程の開発が今、急務となっている。新学習指導要領が実施された当初は、活用型の学力という言い方は見られず、「習得」と「探究」をつなぐ学習の過程とされていた。

しかし、学力テストで 2006 年以降、日本の子どもたちにおける活用型力の未定着、二極化、無回答が進むにつれてＢ問題にも対応できる、所謂活用型学力を明確に位置づけることなしでは主体的な探究型の学習や教科の学びを超えたＥＳＤ教育やキャリア教育にも対応することができないだろう。「習得・活用型学力」の明確化・系統性は、特に「習得」と「探究」の間に存在していた「活用」のステップ化した部分を捉えや

すくすることで、基礎・基本からいきなり飛躍するような指導展開を防ぐ一助とする。教師にとっても漠然としていた指導過程を正しく見直すことができれば、子どもの指導や支援についても効果を上げることが期待できるだろう。

また、国立教育政策研究所が提案した「21 世紀型能力（試案）」でも、「思考力」を軸として、それの土台となる「基礎力」、そして、その活用する「実践力」という力が示されている。「習得・活用型学力」を全員に定着する授業開発も急務であると考える。

「習得」「活用」の流れの中で、「思考力・判断力・表現力等」を育て、生徒自身が、能動的に学び、自立した生き方を身につけることができる、そんな授業づくりや教材開発が目指すと同時に、その地域やその生徒に合った実践も探り、問題意識の幅をもって、研究を進めることがこの 21 世紀に生きる子どもたちに必要な学びにつながると考える。

(2)「習得」「活用」とかかわる評価規準・基準の明確化

「習得」「活用」の授業実践を行うのであれば、国語科到達目標（評価規準・基準、系統性）の明確化・系統性の観点から、それについての説明責任が生まれる。その授業の中で、どんな言語力を身につけさせるのか、実践の中で明確にする必要がある。

また、評価・評定についての課題もあり、「活用」とは何か、はっきりと位置づけを示して論じることがより明確な評価につながると考える。本実践で、何をどこまでわかれば「習得」になり、どのように「活用」できれば思考力･判断力･表現力等が高まったのかを、明らかにし、学習者にとって見通しをもつことができる学習過程を探らなければならない。

(3)星野道夫「アラスカとの出会い」（中３・光村図書）を例に

星野道夫「アラスカとの出会い」（中３・光村図書）を例に、以下の８項目に観点を置き、学習指導から評価まで、効果的な学習過程の在り方を構成した。

(ⅰ)筆者の立場の理解
(ⅱ)時代の常識的な価値観の理解
(ⅲ)現代へのメッセージの理解
(ⅳ)エピソードの選択と場面構成の理解
(ⅴ)表現方法の特色の理解
(ⅵ)資料の選択（データリテラシー）とメッセージの理解
(ⅶ)振り返り（一般化）とメタ認知の形成
(ⅷ)他教科への汎用性や自らの生き方や感じ方への転化

(4)学習過程と身につけさせる言語力の計画

学習過程・段階	時	主な学習内容（活動）	身につけさせる言語力（到達目標）
① 習得１（導入・基礎学習）	1	1 写真クイズをする。 2 写真の読み方を理解する。 3 自分の幼いころの写真を観点に沿って読む。	1 写真リテラシーへの興味・関心を高める。 2 写真を読むことを学ぶ意義、「読み方」がわかる。 3 自分の解釈・考えがもてる。
② 習得２（基本学習）	2 3 4 5 6	4 星野道夫について知る。 5 構成とエピソードの選択の仕方を理解する。 6 場面ごとに詳しく読み取る。 7 星野道夫の生き方・考え方を読み取る。	4 星野道夫の立場について理解する。 5 場面構成とエピソードの選択の仕方がわかる。 6 場面ごとにエピソードの内容や意味がわかる。 7 星野道夫のメッセージや写真に対して自分の考えがもてる。
③ 活用１（発展的学習）	7	8 論理的な書き方を理解する。 9 「写真」を使った論理的な意見文をまとめる。	8 「はじめ・なか・まとめ・むすび」の構成で書くことができる。 9 写真を使った論理的な意見文を書く
④ 活用２（発信・交流学習）	8 9	10 レポートをもとにプレゼンテーションを行う。 11 友達の発表に対して意見をもち、互いの意見を交流する。	10 観点別にグループで交流し、質疑応答ができる。 11 学級全体で交流し、質疑応答ができる。(友達の良さや新たな自己課題の発見へ)
⑤ 評価・一般化	10	12 学習全体を振り返る。 13 振り返りを交流し、今後の生活場面や読書、他教科での学習に生かす視点を獲得する。	12 観点別に自己評価をし、学習したことを一般化できる。 13 学習の振り返りから、今後の生活場面や読書、他教科での学習への発展を意識できる。

５　研究実践の実際
―写真リテラシー学習とノンフィクション教材における「習得」から「活用」へ―

(1)導入・基礎学習【習得型学習１】（１時間）
―写真を読むことを学ぶ意義、読み方を理解する学習

『アラスカとの出会い』の中に、写真が効果的に使われていることを意識し、習得させる力を段階的に生かしながら学習を進めることをねらいとした。そこで、はじめに、写真リテラシー（メディア・リテラシー）の基礎・基本学習を楽しく取り組ませた。

まず、学習シート（資料１）を使い、「学習シートの中にある写真の中で、どれが気になるか、好きか」また、「その理由は何か」発問した。生徒達は、それぞれ気に入った写真を発表し、理由についても「写っている子の表情がおもしろいから」「白クマがかわいいから」「スポーツが好きだから」等の意見が出された。

次に、非言語情報である「写真」とは、ある立場・考え･感情を伝えるために、切り取って組み立てた「もう一つの事実」であること、切り取って組み立てる人は、写真を撮った人であること、写真には写した人の気持ちや考え・伝えたいことが詰まっていることを教えた。

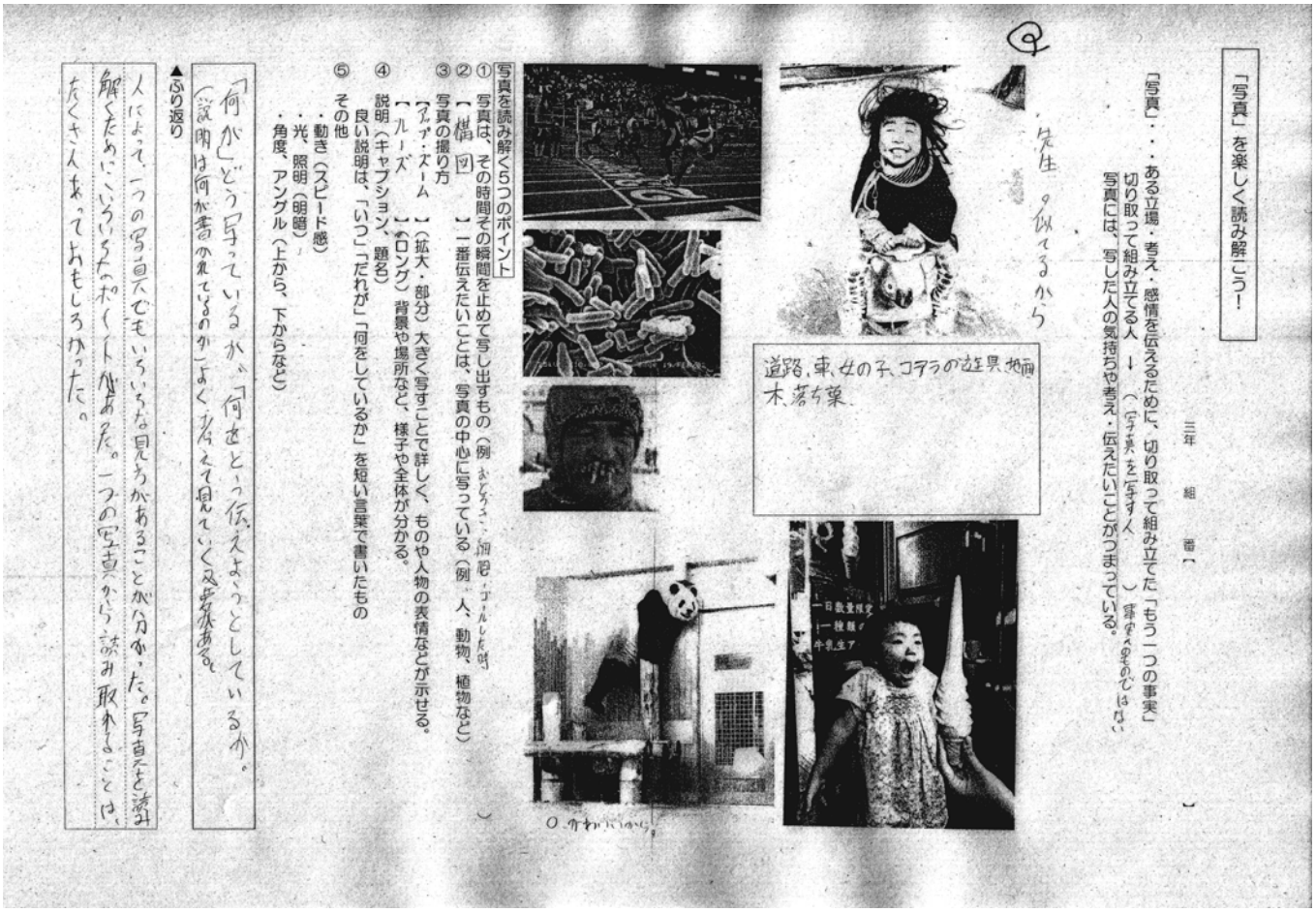
そして、「写真」の持つイメージやメッセージを読み解かせるために、『「写真」を読み解く５つのポイント』、「中心」「構図」「アングル」「キャプション」等の観点を教えた。それを参考にしながら、学習シートの写真を使って、一枚の写真に写っているものを書き出してみたり、タイトルを付けたりした。

写真リテラシーの基礎・基本として「何がどうやって写っているか、写した人は、その写真で何を伝えようとしているか、よく考えて見ていく必要があること」を確かめた。

その後、学習シートに使われている動物の写真は『ア

ラスカとの出会い』の筆者である写真家・星野道夫の筆者の人生観や生き方を読み解いていくための一

（資料１）学習シート「写真リテラシー学習シート」



撮ったものであることを教え、次回から写真が使われているノンフィクション教材の学習をしていくことを伝えた。

(2) 基本学習【習得型学習２】（５時間）

―写真が使われたノンフィクション教材をシンプルに読み解くことから創作に生かす学習―

写真が使われたノンフィクション教材を場面（エピソード）ごとに読み取っていくことで、構成とエピソードの選択の仕方や効果、そこで使われている写真についても、そこに込めた筆者のメッセージや考え方について、方法や技術が理解できるようになる。

ここでは、学習シート（佐藤・蔭山 2005）を参考に、筆者・星野道夫の略歴や場面構成とエピソードの選択の仕方を理解させるための学習を行った。本文を一読した後、ノンフィクションのテキスト形式と場面構成を確認した。読み取りをしながら、学習シートに筆者の年齢やエピソードを書き込むことで、場面を捉えやすくさせた。

読み取りを行い、ノンフィクション教材の筆者のエピソードの選択の仕方を理解させ、感想を述べ合った。助として、筆者の年齢、時間の経過やどんなエピソードが書かれているかを確かめることができた。

『アラスカとの出会い』の読み取りでは、効果的な情報発信能力やプレゼンテーション能力を高めるため、文章中の資料が、どのような意図で選択され、どのような効果をもっているかを考えさせた。

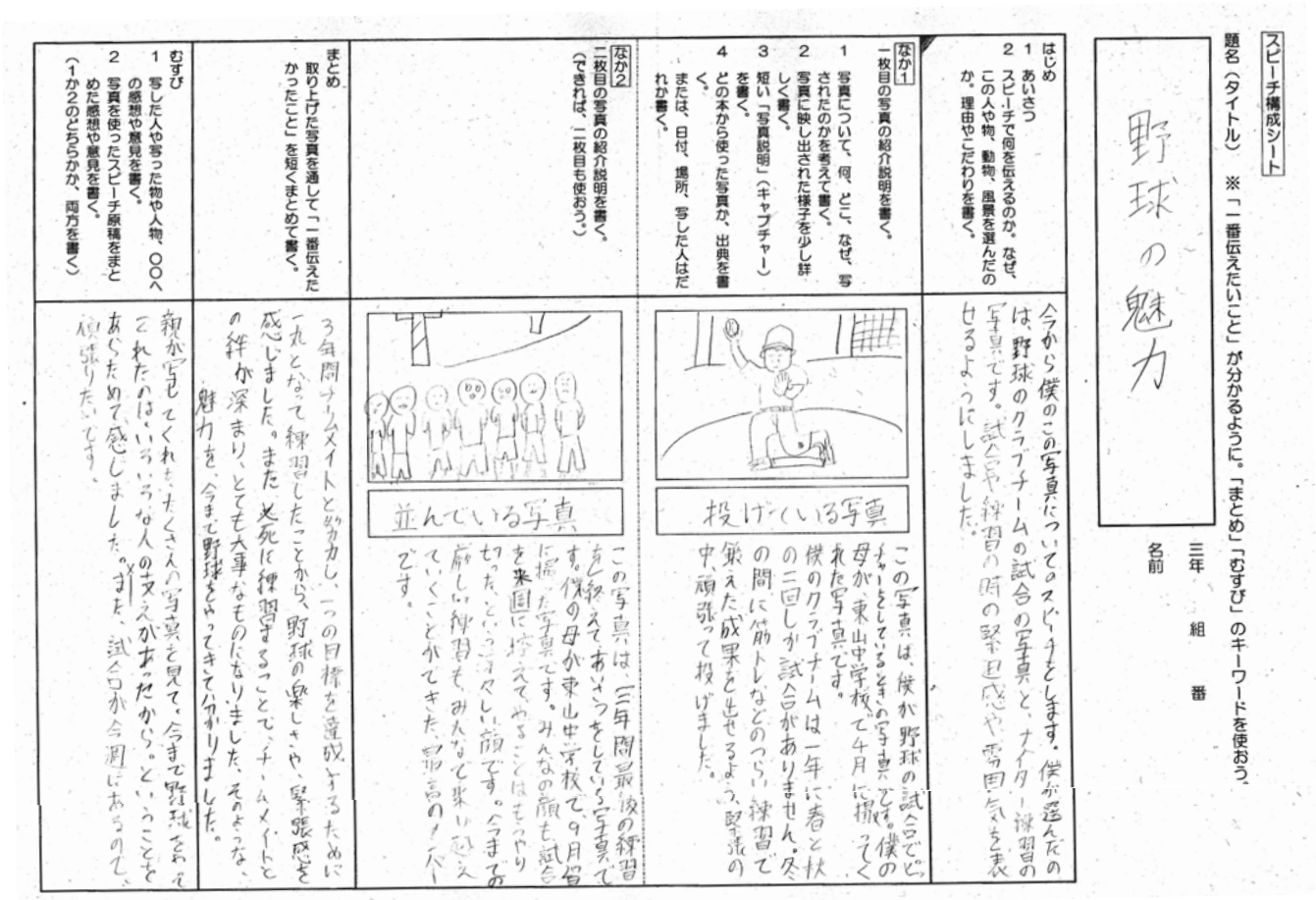
(3) 発展的学習【活用型学習１】（１時間）

―写真を効果的に使った論理的な構成でまとめる学習―

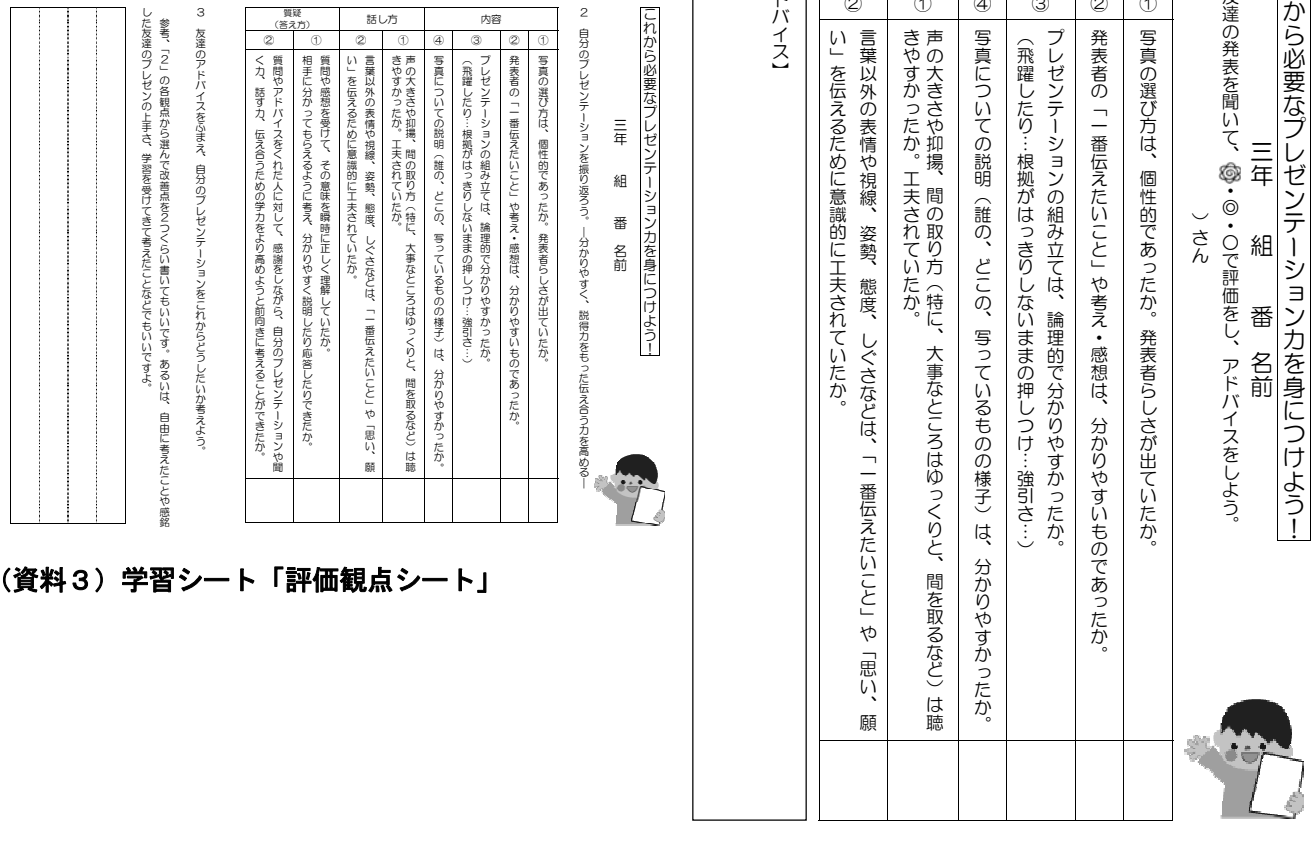
本文の読み取りを行った後、写真を使った効果的なプレゼンテーションをすることを目標に論理的な型を使った文章を書く学習に取り組んだ。

学習シート（資料２）に型を使った構成を作らせた。ノンフィクションのエピソードの選択の仕方（はじめ、なか①、なか②、まとめ、むすび）や写真を使った文章の効果を生かし、学習シート一枚にまとめさせた。『アラスカとの出会い』を参考にノンフィクションの型を生かしながらまとめていくことで、ノンフィクションの文章で描かれる事実の説得力ある力強さと、筆者の魅力的な生き方を再認識することができる。また、

同時にそれらの筆者の事実とこれまでの自分の事実を



（資料２）学習シート「論理的なスピーチ構成シート」



（資料３）学習シート「評価観点シート」

すり合わせたり、重ねたりすることで、自己の生き方や価値観の再構築につなげることができる。

(4) 発信・交流学習【活用型学習２】（２時間）

―相互評価を取り入れた、写真を効果的に使うプレゼンテーション学習―

論理的な型を生かして構成した原稿をもとに、写真を効果的に使ったプレゼンテーションの学習を行った。プレゼンテーションを発信すると同時に相互評価や質疑応答を取り入れ、協働性の高い学習にして取り組んだ。相互評価では、全員が同じ観点をもって評価し合ったり、振り返ったりできるように評価をするための観点を学習シート（資料３）で示した。

授業で、それぞれの観点について、確認しながら意見を出し合うことで、話す内容や話し方について、より具体的に観点の内容を捉えさせた。

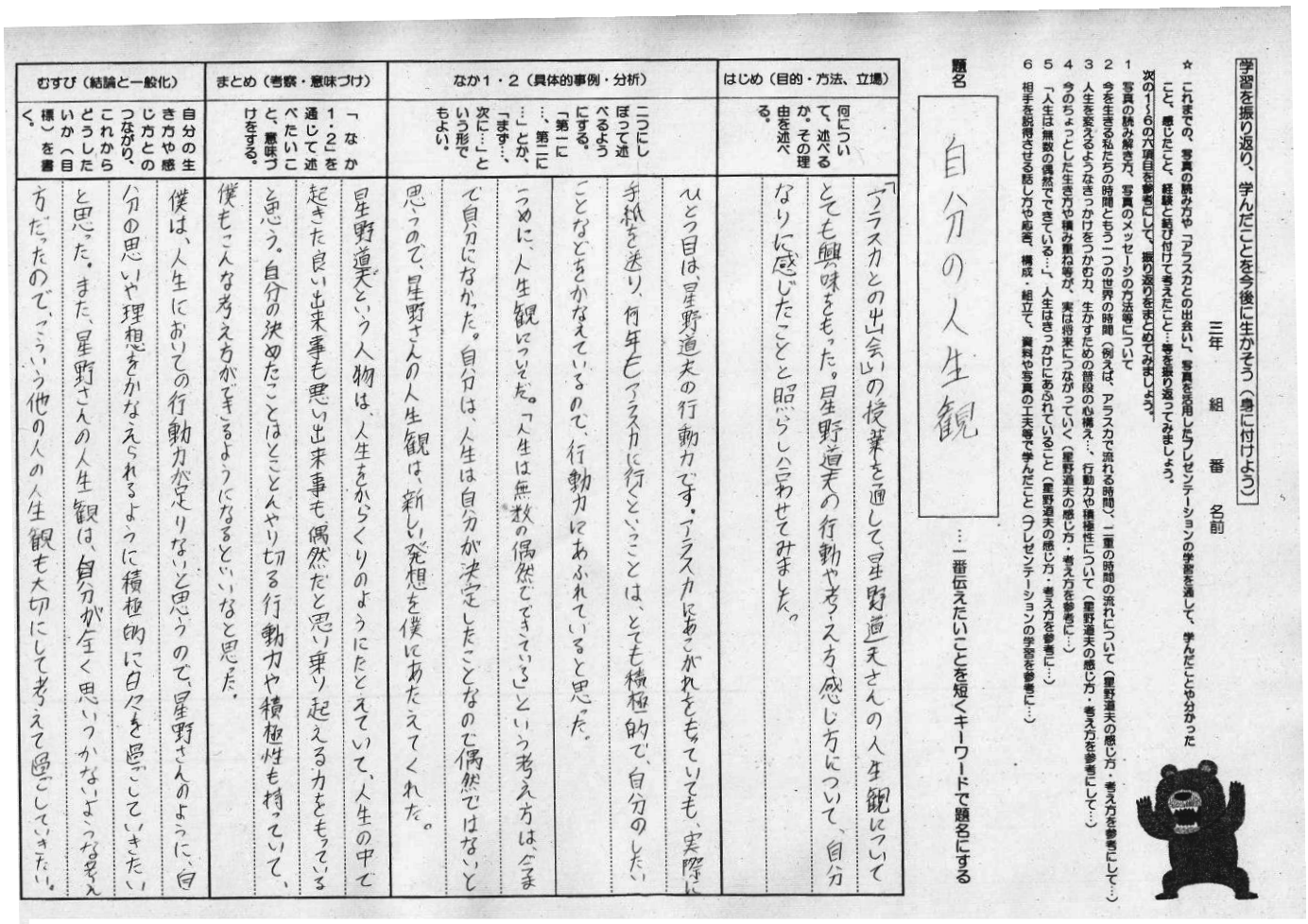
相互評価の観点では、「◎」「○」「△」と誰もが取り組みやすいようなチェック欄をはじめに置き、最後には、具体的に文章で助言が書ける欄も付けた。

自分の中にあるかけがえのない経験や思い、知識を整理して、論理的な型にまとめさせ、それを友達に自己を発信する中で、語句や文を効果的に使い、資料等を活用して説得力のある話をする力や、聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現したりする力を身につけられるようにした。

(5) 評価・一般化学習（１時間）

―学びを振り返り、自己の生き方を見つめる―

学習シート（資料４）を使い、単元全体の振り返りを行った。①メディア・リテラシー（写真の読み解き方、写真のメッセージの方法等）について、②今を生きる私たちの時間ともう一つの世界の時間（例えば、アラスカで流れる時間）、二重の時間の流れについて（星野道夫の感じ方・考え方）③人生を変えるようなきっかけをつかむ力、生かすための普段の心構え…、行動力や積極性について（星野道夫の感じ方・考え方）④今のちょっとした生き方や積み重ね等が、実は将来につながっていくことについて（星野道夫の感じ方・考え方）⑤「人生は.無数の偶然でできている…」、人生はきっかけにあふれていることについて（星野道夫の感じ方・考え方）⑥相手を説得させる話し方や応答、構成・組立て、資料や写真の工夫等で学んだこと（プレゼンテーションの学習）について等、いろいろな視



学習を振り返り、学んだことを今後に生かそう（身に付けよう）

三年　組　番　名前

☆これまでの、写真の読み方や「アラスカとの出会い」、写真を活用したプレゼンテーションの学習を通して、学んだこともわかったこと、感じたこと、経験と結び付けて考えたこと…等を振り返ってみましょう。

次の①～⑥の六項目を参考にして、振り返りを書きとめてみましょう。

1 写真の読み解き方、写真のメッセージの方法等について

2 今を生きる私たちの時間ともう一つの世界の時間（例えば、アラスカで流れる時間）、二重の時間の流れについて（星野道夫の感じ方・考え方を参考にして…）

3 人生を変えるようなきっかけをつかむ力、生かすための普段の心構え…、行動力や積極性について（星野道夫の感じ方・考え方を参考にして…）

4 今のちょっとした生き方や積み重ね等が、実は将来につながっていく（星野道夫の感じ方・考え方を参考に…）

5 「人生は無数の偶然でできている…」、人生はきっかけにあふれていること（星野道夫の感じ方・考え方を参考に…）

6 相手を説得させる話し方や応答、構成・組立て、資料や写真の工夫等で学んだこと（プレゼンテーションの学習を参考に…）

題名

自分の人生観

…一番伝えたいことを短くキーワードで題名にする

はじめ（目的・方法、立場）	なか１・２（具体的事例・分析）		まとめ（考察・意味づけ）	むすび（結論と一般化）
何について、述べるか。その理由を述べる。	二つにしぼって述べるようにする。「第一に…、第二に…」とか、「まず…、次に…」という形でもよい。		「なか１・２」を通じて述べたいこと、意味づけをする。	自分の生き方や感じ方とのつながり、これからどうしたいか（目標）を書く。
「アラスカとの出会い」の授業を通して、星野道夫さんの人生観についてとても興味をもった。星野道夫の行動や考え方、感じ方について、自分なりに感じたことと照らし合わせてみました。	ひと目は、星野道夫の行動力です。アラスカにあこがれをもっていても、実際に手紙を送り、何年もアラスカに行くということは、とても積極的で、自分のしたいことなどをかなえているので、行動力にあふれていると思った。	ふたつめに、人生観についてだ。「人生は無数の偶然でできている」という考え方は、今まで自分になかった。自分は、人生は自分が決定したことなので偶然ではないと思うので、星野さんの人生観は、新しい発想を僕にあたえてくれた。	星野道夫という人物は、人生をからくりのようにとらえていて、人生の中で起きた良い出来事も思い出来事も偶然だと思い乗り起える力をもっていると思う。自分の決めたことはとことんやり切る行動力や積極性も持っていて、僕もこんな考え方ができるようになるといいなと思った。	僕は、人生においての行動力が定りないと思うので、星野さんのように、自分の思いや理想をかなえられるように積極的に日々を過ごしていきたいと思った。また、星野さんの人生観は、自分が全く思いつかないようなそんな考え方だったのでこういう他の人の人生観も大切にして考えて過ごしていきたい。

（資料４）学習シート「単元全体の振り返りシート」

点で振り返りがもてるように作った。

また、文章の書き方についても論理的な構成の型についてより深まるように、ここでもプレゼンテーションと同じように文章を作ることができる学習シートの形を使った。そして、振り返りの文章に短いキーワードで、タイトルをつけさせることで、今回の学習を通して学んだことや、自分ができたことをより明確に自分自身で理解できるように書かせた。

６　研究実践の考察

(1)生き方をつくるノンフィクション教材の活用

『アラスカとの出会い』では、たった一枚の写真を見て、見知らぬ人々が自分の知らない人生を送っている不思議さやその人々と出会えない悲しさを感じる感性、自分の関心をあこがれで終わらさず行動に起こして思いを実現させる実行力、アラスカの地で自分の一生を過ごそうと覚悟を決める決断力など、筆者・星野道夫の「生き方」「感じ方・考え方」について、学習シートで正確に読み取りをすることができた。

生徒の振り返りからは、「私が学んだことは、人生は、自分で決めるということです。普通に過ごして何かが起こるのを待っているのではなく、自分から、何かを始めないと、そのまま、ただ、時が過ぎていくだけになってしまうと思います。だから、良い人生にしたいなら、自分で今やるべきことを決めていかないといけないと思います。そして、そうやって自分で選択してきた人生は絶対に中身の詰まった人生になっていくと思います。」「僕は、人生においての行動力が足りないと思うので、星野さんのように、自分の思いや理想をかなえられるように積極的に日々を過ごしていきたいと思った。また、星野さんの人生観は、自分が全く思いつかないような考え方だったので、こういう他の人の人生観も大切に考えて過ごしていきたい。」「星野さんの行動力や実行力には驚かされた。自分も思い切って一度きりの人生、思い切って行動にうつしてみるのも悪くないかな。」「今までの自分の人生を振り返っても、いろいろな物事が関係していて、未来がつくられているのだと実感した。ちょっとした出来事にも意識して考えていきたくなった。」等、人生観や生き方に関する言葉を見ることができた（下線部は判治による、以下同じ）。

生徒は、読み解きながら、筆者の言葉を通して自分のこれからの生き方や生活経験と結びつけた考えを発言したり、振り返ったりすることで、対話し、生き方を批評的に考えるきっかけになっている。

(2)アクティブラーニング
―学び方の習得から活用へ（生徒の振り返りから）―

身につけさせる言語力に系統性をもたせ、段階的な指導計画を立てることで、「習得」から「活用」へと発展的に学習を進めることができた。

そして、到達目標を明確化することで、その授業で学ぶべき言語力が明らかになり、生徒自身が見通しをもって取り組むことができるようになったと考えられる。

特に、学習シートを活用した授業では、迷うことなく学習を進められていた。学習シートへの書き込みの様子を見ても、ほとんどの生徒が書き込めている状態であり、教材のポイントを絞って全員に学力の保障ができたと言えるだろう。場面ごとに正確に構成を理解させることで、スモールステップを踏みながら、スムーズに授業を展開することができた。

生徒の振り返りからも、「自然と準備に取り組めるようになりました。そして、しっかりとした準備を行うと、その成果を発揮したいという気持ちになり、プレゼンテーションの日がだんだんと楽しみになっているような気がしました。本番当日、これまで、しっかりと準備をしてきたおかげで自信をもって、堂々とプレゼンテーションをすることができました。そして、プレゼンテーションを終えたときの達成感も同時に感じることができました。」という記述が見られ、大変効果的であったと考えられる。

また、学んだことをどのように生かすか、学んだことが身についているか等、振り返る時間を取ったり、伝え合ったり活動をすることで、学びの質を上げながら協働的な学びに繋がったと考えられる。

「習得型学習」から「活用型学習」へ、そして「評価・一般化学習」までに至るまで、学びを定着させながら次の学習にそれを生かしていく場を設定することで、主体性のある学びに変化していていったと言える。

(3)情報リテラシーと思考力・判断力・表現力等の育成（生徒の振り返りから）

今までの国語科では不明確であった、”非言語情報を読み解く方法”をはっきりさせ、学習過程に取り入れたことで、習得型学力を定着・活用すること段階的指導に繋がったということができる。現代社会におけるメディアの発達や多様化に対応させるべく、メディア・リテラシー学習を取り入れたことは、生徒の振り返りにも新しい視点をもたせることができ、それを生活の場面で想定させることもできた。これについては、新しい学力観である「21 世紀型能力（試案）」の育成へと繋がるとみることができる。

振り返りには、「写真とは、様々な感情や様子が伝わるものだと思いました。」「ただ、見て面白いと思う写真でも、今日の授業を受けて、写真の見方が少し変わりました。この写真は、何をしているのか。また周りの様子など、写真からわかる、いろいろなことを探

してみると、いつもとは違った面白さが見えてくることに気づきました。」「写真について改めて考えたのは、初めてでいろいろな発見をすることができました。写真は、そのままの事実を撮っているだけでなく、写真を写した人の考えや伝えたいことがあるからこそ、人をひきつけられるのだと思いました。」とあり、今回、写真リテラシーに焦点を当てて学習を進めたが、写真の読み解き方ひとつからも新しい学力への発見や驚きになったと言える。

(4) メタ認知能力につながるプレゼンテーション学習の評価

「習得・活用型学力」のステップを考えたときに、プレゼンテーションは、大きく二つに分けることができる。

一つは、「分かりやすさ」のある論理的なプレゼンテーションである。思いや考えを伝えたり提案をしたりするために、論理的で正確な表現力に注目したものである。特に、このプレゼンテーションはプレゼンテーション力をつけさせるかと考えた時に、絶対にはずしてはならない基となる「習得型学力」にあたり、これを踏まえた上で「活用型学力」の段階に学習過程をもっていかなくてはならない。

今回の学習では、どの生徒もこの「分かりやすさ」を目指したプレゼンテーションはできていたとみることができる。その結果自己評価の学習シートには高い評価が並べられていた。

もう一つは、「説得力」のある個性的なプレゼンテーションである。「説得力」のあるプレゼンテーションは、「活用型学力」にあたるプレゼンテーションである。

具体的には、相手の行動を変えたり、ものを買わせたりするような聞き手側に納得や感動を与える「説得力」のあるプレゼンテーションである。

授業で生徒たちが発言した「天気予報」や「スティーブ・ジョブズ」「ＳＴＡＰ細胞」等のキーワードと関連して生活の中では、思い浮かべることができた。また、この生徒たちの発言からは、生徒自身も系統的には捉えられてはいないが「活用型学力」にあたるプレゼンテーションを認知していることが分かった。だからこそ、その生徒たちの問題意識をより継続的に生かしながら進めていくカリキュラムマネイジメントが必要であると感じた。

しかし、プレゼンテーションの学習を終えると、「自分の選んだ写真の中から、どんな意味をもっているかを述べて、わかりやすい考察をすることが重要だと感じました。自分の一番伝えたいことを明確に長い言葉ではなく、短い言葉で伝えることが大切だと思いました。このプレゼンテーションの学習で学んだことは、自分が大人になったときやいろいろな場所で活用することができると思います。特にこの勉強では、どのような説明で相手を上手く説得でさせることができるようになるかが、鍵だと感じました。」の生徒のように、振り返りの中で学びの成果を汎用性を含めて感じとっている様子が見られた。

このように相互評価や自己評価の観点を明確に示し、振り返りを行っていくことで、自己の学びの段階や学び方の技術について語ることができた。

生徒たちからの振り返りからは、「最近、前よりも人に物事や勉強を教えることが多くなり、説明をして、わかる？と聞くと？という返事が返ってくるので、このことや、プレゼンテーションを踏まえて、私にはまだ伝える力が足りないことを知りました。また、相手に伝えるということは、自分がこれを伝えたいと考えがまとまっていることも大切だと思いました。」「話す内容だけでなく、話し方についても意識して発表することができた。」「○○君の話は、彼にしか話せないことで、話し方や話のもっていき方もとても魅力的だった。」「自分のプレゼンテーションと比べて、○○さんの発表は、写真と話が合っていてすごく分かりやすかった」等、自己の学びと他者の学びの様子を観点に基づいて客観的に語るのみでなく自分自身の表現が生き方に結び付けることができるようになっている意見や感想も見られた。

7　結論―まとめにかえて―

(1) 21 世紀に生きるこれからの国語科教育

「第２期教育振興基本計画」(2013 年 6 月閣議決定)で示されたように、多様化してきた現代社会を「たくましく生き抜く」ため、「個人として自立し、他者との協働的な学びによる新たな知識や生き方の創造」が目指されている。その中で、ノンフィクション教材学習を取り入れ、段階的、系統的に指導を行ったことで、教科の深い学びへのステップアップとしての基礎・基本の学力が保障されたと考える。そこには、学習シートを開発･活用したことによって、どの生徒も参加し、学力を定着することができたと考える。そして、生徒は、学んだことを生かしながら学習を進めたことで、生徒自身が「習得」「活用」を意識した学習過程を踏むことができた。

教科での学びを従来の国語科固有の学びに留まらず、メディア・リテラシー能力やプレゼンテーション能力に広げたり、深めたりすることで、他教科や生き方に繋がるような汎用性や実践力の成長を示すことができたと考える。

(2) 今後の課題と展開―３つの視点から-

今回の実践研究からは、「習得・活用」を生かした授業の中で学びを自分の生き方や価値観と関連づけた

りする生徒たちの生き生きとした姿が見られた。今回の学習の成果を一層高めるために、３つの視点から整理し、今後の課題と展望としたい。

一つ目は、授業者としての「21 世紀型能力・学力」の捉えである。文科省、国立教育政策研究所等が検討・議論をすすめている資質や能力観を理解し、学習の中で系統的・段階的な指導過程（習得・活用・探究）を位置づけることで「教科の学びを生き方や価値観と関連づけるメタ認知・学び方を学ぶ学習」「教科の学びを超えた汎用的能力・カリキュラム開発」等の具体化をねらうことができる。

二つ目は、新たに教科書教材としても増えてきた多様なテキスト形式の解釈・判断力（活用・探究）である。従来の国語科教育で分けられた「文学的文章」「説明的文章」という二つの概念に留まることなく、事実を記述した文章であるノンフィクションや随筆、写真集等の価値や意味を理解し、授業にすることで、21 世紀を生き抜く子どもたちにとって魅力的な「生き方」を学ぶことができる学習となる。

三つ目は、明確な系統的・段階的な指導過程（習得・活用・探究）や授業評価を位置づけたカリキュラム・マネジメントの必要性である。「習得を生かして活用する力（知っていることから何ができるか）」等を生徒自身が考えることで、より主体的に学習に取り組ませることで、自分のこれからの生き方を考え、発言したり、振り返ったりすることで、自己と対話し、生き方を批評的に考えるきっかけになるような、学びを創ることができる。

【注記】

１．「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会―論点整理―」（文部科学省 2014 年）

２．『教育過程の編成に関する基礎的研究　報告書７』（国立教育政策研究所 2014 年）

３．楠見孝・道田泰司編著『批判的思考 21 世紀を行きぬくリテラシーの基盤』（新曜社 2015 年）

４．学校教育法

【主な参考文献】

１　文部科学省・中央教育審議会等

(1)『中学校学習指導要領』（文部科学省 2008 年）、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」（中央教育審議会 2008 年）、「児童生徒の学習評価の在り方について」（中央教育審議会 2010 年）

(2)「第２期教育振興基本計画」（中央教育審議会 2013 年）、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問の概要（中央教育審議会 2014 年）、『教育課程の編成に関する基礎的研究　報告書５』（国立教育政策研究所 2013 年）、「グローバル時代の国際教育のあり方国際比較調査・最終報告書」（独立行政法人国際協力機構、地球ひろば、（株）国際開発センター2014 年）

２　国語科教育関連

(1)『国語科教育研究大辞典』（明治図書出版 1991 年）、『国語教材研究大辞典』（明治図書出版 1992 年）、『国語教育指導用語辞典』（教育出版 2009 年）、『国語教育辞典』（朝倉書店 2001 年）

(2) 佐藤洋一編著『国語科『習得・活用型学力』の開発と授業モデル４　伝記・ノンフィクション編』（明治図書 2011 年）、同「学ぶ楽しさ、教える楽しさ」（『教育と医学 2014 年５月号』慶応大学出版会 2014 年）、同「全教科の中核としての『国語科習得・活用型学力』の開発と授業－21 世紀スキル（学びと評価リテラシー）の再構築－」（『国文学言語と文芸第 129 号』言語と文芸の会 2013 年）、佐藤洋一・蔭山江梨子「事実・生き方の記録（ノンフィクション）の『学び方・評価』学習―『アラスカとの出会い』（星野道夫 中３・光村図書）を例に―」（愛知教育大学研究報告第 54 輯『教育科学編』2005 年）、佐藤洋一・吉川和良「ノンフィクション（伝記）教材から『生き方』を考えさせる授業開発―『炎を見ろ』（伴田薫）の習得から理論的な読書レポート作成（活用）へ―」（愛知教育大学研究報告第 60 輯『教育科学編』2010 年）、佐藤洋一・有田弘樹「随筆教材のテキスト形式を活かす『習得・活用』『批評』－『自立・協働・創造』につながる授業の開発－」（愛知教育大学研究報告第 63 輯『教育科学編』2014 年）

３　ノンフィクション・ルポタージュ関連

星野道夫『旅をする木』（文藝春秋 1999 年）、同『ノーザンライツ』（新潮社 2000 年）、同『長い旅の途上』（文藝春秋 2002 年）、同『魔法のことば』（文藝春秋 2010 年）、同『悠久の時を旅する』（クレヴィス 2012 年）、同『アラスカ風のような物語』（小学館 1998 年）、同『未来への地図―新しい一歩を踏み出すあなたに―』（朝日出版社 2005 年）、同『アラスカ光と風』（福音館書店 1995 年）、同『LOVE in Alaska 星のような物語』（小学館 2006 年）同『森へ』（福音館書店 1996 年）、同『ぼくの出会ったアラスカ』（小学館 2004 年）、エドガースノー『中国の赤い星』（筑摩書房 1995 年）、沢木耕太郎『キャパの十字架』（文藝春秋 2015 年）、柳田邦夫『マッハの恐怖』（新潮社 1986 年）

４　メディア・リテラシー教育関連

佐藤洋一編著『実践　国語科から展開するメディア・リテラシー教育』（明治図書 2002 年）、鈴木みどり『最新 Study Guide メディア・リテラシー入門編』（リベルタ出版 2013 年）、中橋雄『メディア・リテラシー論』（北樹出版 2014 年）、池上彰『池上彰のメディア・リテラシー入門』（オクムラ書店 2008 年）

【付記】

本研究を進めるにあたり、ご支援いただいた愛知県教育委員会、西三河教育事務所、安城市教育委員会に感謝致します。また、多くの協力をいただいた校長先生はじめ教職員の皆様に感謝致します。そして、丁寧かつ熱心なご指導をいただいた愛知教育大学教職大学院の佐藤洋一教授に感謝の意を表します。この教職大学院で得た学びを少しでも現場の子どもたちや先生方へ還元できるように努めてまいりたいと思います。